

(別紙様式3)

令和2年 3月31日

## 研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都小平市たかの台2番1号  
管理機関名 学校法人 創価学園  
代表者名 理事長 原田 光治 印

令和1年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

### 記

#### 1 事業の実施期間

平成31年 4月1日(契約締結日)～令和2年 3月31日

#### 2 指定校名

学校名 関西創価高等学校  
学校長名 杉本 規彦

#### 3 研究開発名

TRY 人(じん)の郷・交野から  
平和の創造に挑戦するグローバルリーダー育成プログラム

#### 4 研究開発概要

関西創価高校がSGHを通して生徒に身につけさせたい力は、国連の提起する地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」である。Active Learningの土台の上に、全校生徒を対象とした「環境・開発・人権・平和」の4分野について学ぶ探究型総合学習GRIT(Global Research and Inquiry Time)やGlobal Citizenship Seminar、希望者を対象とした知的好奇心を高揚させる高大連携プログラムのUP(University Partnership)Class、希望者から選抜された生徒がオールイングリッシュで徹底した探究を行うLC(Learning Cluster)で、確かな知識と広い教養の涵養を目指す「世界市民教育」の教育課程を高大連携して研究開発する。

#### 5 管理機関の取組・支援実績

##### (1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会の開催					○			○			○	

(2) 実績の説明

- 運営指導委員会を、朝野富三氏、梶田叡一氏、米田伸次氏ら三氏が出席し、3回開催した。1回目は8月27日に実施。2回目は11月の中間研究発表会終了後、3回目は2月の最終研究発表会終了後に開催。議事録を作成し、今後の研究開発について助言を頂いた。
- 研究発表会ならびに運営指導委員会に、管理機関より、創価教育センター長、副センター長を派遣し、研究開発が適正に行われているか確認した。
- SGHに関わる経費について、管理機関より190万円の経費を計上し、研究開発が円滑に進むように支援を行った。それによりフィールドワークの生徒負担金軽減や外部講師・大学院TAの費用を賄うことができた。（全校生徒対象に実施）

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 (平成31年4月1日 ~ 令和2年3月31日)												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
GRIT 1	←											→	
GRIT 2	←											→	
GRIT 3	←											→	
Global Citizenship Seminar				○				○		○			
GRIT Field Work				○	○							○	
University Partnership Class	←											→	
Advanced English Class	←											→	
Advanced Math Class	←											→	
Learning Cluster	←											→	
Field Work in Tokyo				○									
Field Work in America										○			
Active Learning	←											→	
Global Camp			○			○							
Newspaper in Education	←											→	
Feel Japan Program	←											→	

(2) 実績の説明

- GRIT（探究型総合学習、「環境・開発・人権・平和」について探究）については、3年間で行うプログラムの内容と教授法を確定し、持続可能な形で関西創価の世界市民教育として確立することができた。主体的で対話的な深い学びの中で、世界市民としての使命感・共感力・問題解決への創造力を培う学習内容を、全教員が共有し運営していくシステムが完成した。
- 具体的には、GRITの内容が各教科に落とし込まれた。1年生ではSDGsの内容を「地理」で徹底して学び、探究しながらプレゼン発表までできるようになった。環境分野の「校内

フィールドワーク」においては、「生物」の授業で行うことにより、理科の教員が担当し、専門的な見地からのアドバイスも含め、より深い学びとなった。また、論理的思考を養ったり、言語技術的な内容を教えるための5行エッセイを「国語」と「英語」で同時に行った。2年生では、「課題探究」を徹底して行うために、担当の全教員が「課題探究メソッド」を身につけるための研鑽を行い、育成のプログラムが完成した。大学院生によるプレゼンテーションに必要な「いかに伝えるのか どのように伝えるのか」という知識と技術を習得するための講義・授業を2回実施、自分たちでもブラッシュアップできる技術を身につけた。3年生では「模擬国連」の内容を深めるためのリサーチの時間をGRITの時間だけでなく、「政治・経済」の授業の中で、各自の担当国のリサーチする時間を確保し、政治や経済についてのプレゼン発表を行った。その上で「模擬国連」で培った、各国大使としてのリサーチを論文として論理的にまとめ、授業の中でルブリックを用いて成績として評価するシステムが構築できた。「数学」の授業では、データ分析やエビデンスを示すのに必要な数値を読み取る、統計学を用いた分析力を培った。論文作成を踏まえ、アカデミックライティング講座を、大学教員を招いて2回行い、講義の前には「現代文」の授業とも連携し、きめ細やかに指導した。アカデミックライティング講座は、生徒から大変に良い評価を得るとともに、高大連携が大きく進んだ。また、GRITで作成した論文を基に、「英語」の授業では英語サマリーの作成を行い、その内容を成績として評価した。このように各教科の中でGRITの取り組みを成績として評価できたことで、GRITに取り組む生徒の意識がさらに向上し、内容のレベルも定着した。

○Global Citizenship Seminarとして外部講師を招いての講演を全校生徒に対して3回行った。また、平和構築のエンパワーメント育成を目指して、女性にターゲットを絞った「全校女子集会」を関西創価中学校も巻き込んで開催。ユネスコアジア親善大使のアグネス・チャン氏を講師に迎え「平和」について学び深めた。

○GRIT Field Workとして7月に東京10名、8月に広島14名、3月に東北10名でのField Workを一般公募し実施した。特に「平和」をテーマに核廃絶について探究活動を行った広島FWでは、本校が所在する交野市内各所で「核兵器禁止条約締結」に向けての署名活動を実施することができた。東京FWでは、JICA地球ひろばにおいて、JICAフイジー事務所とオンラインで英語セッションを行った。東北FWでは東北大学とセッションを行い、SGH校の仙台二華高校とセッションする計画だったが、コロナウィルスの関係で中止になった。

○Fieldwork in Americaでは、「核兵器廃絶」をメインテーマにカリフォルニア大学ロサンゼルス校、カリフォルニア大学アーバイン校、サンディエゴ大学、アメリカ創価大学の教授と学生へのプレゼンテーションとディスカッションを通し、探究課題への理解と提言内容をさらに深めた。また、昨年同様、ウォルドルフ学校を訪問し、「Discussion on Global Issues」を開催した。今年度は本校と同じユネスコスクールであるザ・グラウアー・スクールでも同じようにフォーラムを開催した。

○SOKA Progress Classについては、University Partnership (通称UP)Classを開設し、大学などから講師を招き地球的課題の基礎講座を開催した。Advanced English & Math Classは継続して実施。どの講座も生徒から高い評価を得た。

○Learning Clusterについては、高校2,3年生より22名を選抜し、Field Work in Tokyo、Field Work in Americaを実施。年間を通して英語での探究が進み、高校生に

よる平和への提言「Peace Proposal」を完成させた。生徒たちは「環境・開発・人権・平和」の四分野をSDGsに照らして学んだ後、「核廃絶」に焦点を当て研究を続けた。

○Active Learningについては、校内で研究授業ウィークを2回開催し、お互いの授業内容の研鑽に努めた。現在、ほぼすべての授業で、主体的で対話的な深い学びを意識した授業が定着した。各教科においても、GRITの内容を教科横断でさらに深めるための研究が進み、取り組みが大きく向上した。

○Newspaper in Educationについては、年間通して各クラスで取り組み、コンクールでも多くの入賞者が出た。

○Feel Japan Programについては、奈良・京都への校外学習をフィールドワークとして行った。

○その他の取り組みとしては、本校で進めるGRITの四分野の一つである「人権」について、多くの卒業生の弁護士を招き、現実社会を踏まえての「人権研修」を行った。

また、本校のSGH運営指導委員でもある、梶田叡一氏を招き、本校のSGH最終報告会において、講演会「グローバル社会を生き抜く資質・能力の育成」を多くの教育機関、行政関係者を招き盛大に開催した。

○SGH後のカリキュラムについては、新教育課程を見据えて、「新カリキュラム検討委員会」を発足させ、集中討議の職員会議を何度も開催し、全教員で「育てたい力」についての議論を重ねた。具体的には、GRIT1としての「探究基礎」「アカデミックライティング」を科目として設定し、さらに深い学びを計画している

## 7 目標の進捗状況、成果、評価

関西創価高校がSGHを通して生徒に身につけさせたい力は、国連の提起する地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」である。この目標を見据えながら、教員の指導体制も含めて確認したい。

○SGH最終の5年目となり、すべての教員が3年間でのGRITのカリキュラムの流れを認識・理解・経験することで、「育てたい人物像」に沿った、「育てたい力」を明確にしたプログラムが完成した。1年次は「グローバル 이슈との出会い」をテーマに、「環境」「開発」「人権」「平和」に関する知識のインプットとディスカッションを中心としたプログラムを、SDGsに照らして様々に行った。全生徒がタブレットを持ったことで、本校がNASAと共同で行う「アースカムプロジェクト」に全員が参加可能となり、宇宙から俯瞰的に地球を見つめる目線を持たせることができた。新たなプログラムとしては「AI兵器」を取り入れ、現時点でのAI兵器の現状をリサーチさせるとともに、自律型致死兵器システム(LAWS)にどう向き合うのかを考え、アメリカとイランの現在の戦闘についても深く考える機会となった。GRITの大きな柱であるSDGsについては、「地理」の教科の中で定着した。そのことで、SDGsの学びの深さを授業の成績として評価が可能となり、生徒たちの意識が向上した。チームで別れてSDGsを推進する国内の自治体や企業に対して調査を行い、その振り返りを授業で行ったり、お互いにプレゼン発表することで、身近なところにも、自分たちにできることがあることを学んだ。2年次は「グローバル 이슈との戦い」をテーマに、「環境・開発・人権・平和」の4分野からトピックをチームで選んで探究活動を行った。探究に先駆け、世界の識者(アーノルド・J・トインビー、

ミハイル・S・ゴルバチョフ、ライナス・ポーリング、ヘンリー・A・キッシンジャー、アンワルル・K・チョウドリ等)と本校の創立者との対談集を学び、世界の識者の考えるグローバルイシューを基に自分たちの取り組みたいトピックを決定。それぞれのチームが1年間かけて探究活動を行い、自分たちなりの提言をまとめた。それぞれのチームが6月には大学教授に探究成果と提言を発表。大学院生によるブラッシュアップを受けて、全チームがパワーポイントを使ってSDGsに照らし合わせたそれぞれの研究・提言を保護者会で発表。3月にはポスターにまとめ、「学年ポスターセッション」を全学年61チームで開催を計画。例年、発表の対象として高校1年生を招待し、総勢700名を超える大規模なポスターセッションを行っている。(本年度はコロナウィルスの関係で中止)このポスターセッションは昨年度から一般にも公開し、教育関係者をはじめ多くの参観を得た。高校2年生にとっては、後輩に1年間の学びを自分の言葉で発表する機会となり、1年生にとっては、来年自分たちがあるべき学びの姿を確認することができ、質疑応答も活発に行える。3年次は「世界を一つにする力」をテーマに、合意形成の力を培った。その集大成として、3年生350名全員で、100ヶ国を分担して模擬国連に取り組んだ。「貧困により教育を受けられないすべての子どもへの公平かつ質の高い初等教育の実現」の議題で総会を2回開催。第1回総会では、高校2年生全員を対象に、スカイプを使用して教室に生中継でした。教員による解説も入れながら、模擬国連総会の模様を見学させることで、ロビー活動の際には2年生へのアドバイスも可能となり、来年度に自分たちの行うプログラムのイメージを持たせることができた。このスカイプ中継を高校2年生教員がキャスターとして担当することで、3年次に行う模擬国連のプログラムへのスムーズな移行が実現している。第2回目の総会をSGH中間報告会の日に行うことで、関西創価の学びの成果を大きく教育関係者や行政にも公表することができた。SGH終了後も一般公開並びに他校との交流も検討しており、さらに発展させていきたい。昨年度よりは、SGH委員会の集中討議の際に、1年次、2年次、3年次に行うGRITプログラムの内容や時期、反省点や引き継ぎ事項をグーグルドライブのチームドライブに各学年ごとにまとめ、全教員が昨年度のどの時期にどのようなプログラムを、どのような教材で行ったかが確認でき、反省点や改善点を共有しながらPDCAがスムーズに行える環境が整備された。高校3年生対象の、大学教員を招いての「アカデミック・ライティング講座」は2回行った。大学教員と国語科教員が連携を取りながら、「国語」の授業で事前学習を行い、内容の濃いものとなった。個人の学びの集大成としては、模擬国連の中で各国大使の目線で、「貧困により教育を受けられないすべての子どもへの公平かつ質の高い初等教育の実現」について取り組んだことをGRIT論文としてまとめ、その内容は「政治・経済」の授業で成績として評価した。完成したGRIT論文を基に、「英語」の授業で「英語サマリー」を作成させ、その内容を授業の成績として評価した。教科と連携させることで模擬国連総会の終了後に自分の学びを振り返らせ、自分の考えを論理的に「日本語」と「英語」で発信する方法を身につけさせることができた。昨年以上に成果物の内容も大きく向上した。

○GRITを全校生徒対象に全教員で取り組んだことで、生徒も教師もGRITで行われているActive Learningの様々な手法や効果をよく理解している。その為、全教科に渡ってストレスなくActive Learningの様々な手法が活用され、「主体的・対話的な深い学び」が多くの教科・授業で実践できた。また、GRITで学ぶ内容やGRITを通して育てたい人間像を全教員が把握しているため、その力を育むための教科横断が進んでいる。また、

SGH 後の GRIT についても全教員で研修会と討論会を開催し、GRIT の継続が確認された。GRIT の内容自体が世界の情勢や新しい情報に左右されるため、さらに内容更新や精査を行い常に時代に即した更新の必要性を確認した。

○全校生徒にタブレットが貸与されて 4 年目となり、ICT を活用した Active Learning や協働学習が定着してきた。しかし、高度な作業に関してはタブレットには限界があるため、来年度の 1 年生より、Chromebook の貸与に切り替えた。パソコンの BYOD と並行してさらに高度な ICT 教育に取り組んでいく。

○生徒の意識の変容は各種のコンクールや大会への参加にも表れた。JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストでは特別学校賞を受賞するなど、多くの生徒が自主的に参加活躍し、多数の受賞者を輩出した。

○米国ミドルベリー大学院モンレー校大量破壊兵器不拡散研究所での「日米露の高校生による核不拡散教育会議」(CIF) に 2 名が参加、高い評価を受けた。

○第 9 回 ESD(持続可能な開発のための教育)国際交流プログラムに、高校 2 年生の生徒が全国 8 名の代表に選ばれ、ドイツフランス研修に参加した。

○「第二十二代高校生平和大使」として、高校 2 年生の生徒が大阪代表に選ばれ、スイス・ジュネーブにある国連本部を訪問した。

○第 66 回「国際理解・国際協力のための高校生主張コンクール」において、高校 2 年生生徒が大阪府代表となり、全国大会に出場した。

○Learning Cluster では、「核廃棄廃絶」をテーマに据え、一年間をかけ、高校生による平和提言「High School Peace Proposal」を作成した。活動中、東京へのフィールドワーク、海外へのフィールドワークも行い、専門家や大学教授から講評をいただき、探究課題をさらに深める機会とした。ポスターを作成したグループやボードゲームを作成したグループ等、核兵器の脅威をどのように実感してもらえるのか発表方法にも工夫を凝らした。

○University Partnership Class を受講した生徒は、各界で活躍する様々な分野の講師から、1 年間にわたり講義を受け、主体的・対話的で深い学びとなった。

○「世界津波の日」高校サミット in 北海道に 3 名参加。日本を含む世界 44 カ国、約 394 名の生徒とともに調査を行い、自然災害に対する知識を深め、アクションプランのプレゼンテーションを行った。

○トビタテ！留学 JAPAN に 3 名が選出されアメリカ、アイルランド、カナダへ留学した。

○世界に興味を持ち、多くの生徒が海外に旅立った。国際会議ならびに SGH としてのフィールドワークで 17 名、個人留学で 31 名、合計 48 名がこの 1 年間で海外に実際に足を運び探究活動を行った。

○運営指導委員会を 3 回開催し、運営指導委員からは「関西創価としての取り組みとしては大きく成功している。SGH 終了後にどのように学校としてこのプログラムを財産として残していくのか。また、これからも続くユネスコスクールとして、どのように関西創価の世界市民教育を発信し続けるかが今後の課題」との教示があった。

○ユネスコスクールとしての取り組みも開始。カナダでの核平和青年サミットに関西創価の教員が招聘され、本校の SGH の取り組みを報告。終了後には、カナダ・ユネスコ協会の責任者から「関西創価の世界市民教育は模範であり、カナダのユネスコスクーでも共有したい」との言葉が寄せられた。さらにユネスコスクールのネットワークを活かして、本

校の取り組みを地域や世界へ広げていきたい。

## 8 「5年間の研究開発を終えて」

○関西創価のSGHプログラムは、平成26年度のSGHAを含めて6年目となる。本校のメインプログラム探求型総合学習GRITについて、研究開発の変遷を記載する。

平成26年度のSGHAの時には、予算もない関係で「お金が無くてもできるプログラム」ということで、全校生徒対象としては、探求型総合学習GRIT (Global Research and Inquiry Time)の4分野教育(環境・開発・人権・平和)と世界で活躍している方に講演していただくGlobal Citizenship Seminar、希望者の中から選抜してオールイングリッシュで地球的課題を学ぶLC (Learning Cluster) からスタートした。土曜日を利用して行うGRITは3学年同時進行でスタートし、いま世界で起こっているグローバルイシューについて全校生徒が知る機会となった。グローバルイシューについて学ぶ中で、興味・関心を持った希望者の中から選抜されたLCは意識も非常に高く、知識だけでなくリーダーとしての資質も磨くプログラムとなった。当初、世界市民教育をスタートさせることに対し、生徒たちの関心度合いが危惧されたが、環境・開発・人権・平和のグローバルイシューについて学ぶ内容は、昨今の地球温暖化に伴う気候変動の災害被害の増加などもあり、生徒の学力の高低に関係なく大きな関心事項として受け入れられた。また、世界の各地で起こる、紛争や難民の問題も、同世代の多くの子供や青年が被害者となっている事実を知ることによって、生徒にとって「どうしても解決したい課題」と受け止められ、学びが大きく進んだ。当初、毎回のGRITプログラムの運営に、消極的だった教員も、生徒が生き生きと学ぶ姿に触発され、GRITに取り組む姿勢が大きく変わった。

平成27年度にはSGH校に指定され、予算も計上されたため、新たにUniversity Partnership (通称UP)Class を開設、大学・企業・国際機関と連携して、希望者に学びの場を提供した。また、国内(広島・東京・北陸)と海外(アメリカ・マレーシア)のフィールドワークも開始し、希望者の中から現地に調査ができる環境を整えた。学びの形態も全校生徒対象のGRIT、希望者が全員受けることのできるUP、希望者から選抜されたメンバーで1年間行うLCという関西創価のSGHプログラムの骨格が完成した。平成27年度は、GRITにおいては、じっくりと学ばせたいとの意見もあり、高校1年生の1年間で4分野を学ぶのではなく、1年生で「環境・開発」、2年生で「人権・平和」というように、2年間で4分野を学ぶ方向性に切り替えた。SGHAで1年間4分野教育(環境・開発・人権・平和)を学んできた2年生に対して、GRITを進める中で、知識のインプットとディスカッションだけで本当に深い学びになるのか?との声が上がると、1年生で学んだ4分野から、自分たちで興味関心を持ったトピックを選び、創価大学と高大接続を行いながら1年間かけての「課題探究」を行うプログラムが開発された。

平成28年度には、昨年度に高校1年生は1年間で4分野を学ぶのではなく、1年生で「環境・開発」、2年生で「人権・平和」というように、2年間で4分野をじっくりと学ぶ方向に決めたが、創価大学と高大接続を行いながら生徒たち自身がトピッ

クを選んで1年間かけての「課題探究」を2年生で行うのなら、1年生は「環境・開発・人権・平和」の4分野の教育を幅広く学ぶことが大切ということになり、元の形に戻った。1年生で「4分野教育」2年生で「課題探究」を学んできた生徒が3年生となることから、さらに発展したプログラムが必要となり、3年生では「国際的な合意形成」の体験をさせる「模擬国連」を、学年全員350人で行うことが決定。また、3年生の「模擬国連」で各国大使として活動した視点で、模擬国連の議題に沿って論文作成と論文を英語サマリーとして作成させるプログラムが開発された。この時点で、手探りではあったが現在の関西創価のSGHプログラムの基本形が完成した。この時点での問題点は、1年生でのプログラムは、SGHAも入れて3年目ということで精査された内容として確立されたが、2年生で行う「課題探究」においては6月に行う創価大学研修までにある程度完成させたため、非常に浅い探究になったことと、6月以降の取り組みにモチベーションが下がってしまい、2学期、3学期に取り組む内容が不十分であった。3年生で行う「模擬国連」においても、教員の経験不足もあり苦労した部分と、「模擬国連」の総会まではモチベーションを保てたが、総会終了後の、個人の論文作成、英語サマリーについては、しっかりとした成果物を作成させるには至らなかった。英語サマリーについては、教科横断の形で成果物を成績に組み込むことを開始したが、基礎となる論文の完成度が低いため、まずは日本語での論文の内容を向上させることが課題となった。高校3年生の「模擬国連」は国連総会を2回行うが、その第1回目を高校2年生に公開することで、2年生も「模擬国連」に興味関心を持ち、次年度へのスムーズな移行へとつながった。

平成29年度には、2年生での「課題探究」のプレゼンテーション作成と発表に関して、モチベーションを維持させるために、「課題探究計画書」をグループで作成させてスケジュールを管理、6月の創価大学での発表については、プレゼンテーションの完成とはせず、「リサーチクエスト」「仮説」の作成とし、その内容を大学教授にアドバイスをもらうことに留め、この後の研究時間の確保と、スケジュールを管理することでモチベーションを維持させた。また、グループの中で代表選手型の取り組みになりがちだったことに対しては、高校1年生への学年ポスターセッションを3学期に行うことで、全員が自分の言葉で後輩に説明する機会を設けることができ、全員の意識が大きく向上した。また、各国大使として活動した視点で作成するGRIT論文作成のクオリティ向上のために、創価大学から教員を招き「アカデミックライティング講座」を開設した。内容としては、大学1年生で学ぶ、学術的な論文のルールや手法である。「模擬国連」において、土曜日のGRITの時間だけでは、各国リサーチが時間不足で、浅い内容となるため、政治・経済の授業と連携し、リサーチとディスカッションの時間を確保した。

平成30年度には、高校2年生で行う学年ポスターセッションを、高校1年生への発表だけでなく、一般の希望者や教育関係者にも大きく公開した。交野市の中学教員を招待して参加してもらった結果、大変に感動され、交野市の中学校において、関西創価の取り組みをモデルにした先輩から後輩へのポスターセッションが開催された。高校3年生の「模擬国連」の運営については「模擬国連部」と連携を取りながら、関西創価独自の方法を確立した。GRIT論文作成に関しては、GRIT論文の2000字の内容を、政治・経済の成績に評価として入れることで、生徒たちの論文に取り組む意識



が大きく向上した。

令和元年度には、高校2年生の「課題研究」について、職員会議の中で研修会を行い教員が「課題探究メソッド」を確立。生徒たちに課題探究の手法について細かく指導するとともに、発表の手法についても細かくレクチャーすることができた。高校3年生で行う、大学教員を招いての「アカデミックライティング講座」は、より内容を充実させるため、年2回の開催とし、大学教員と国語科の教員が連携を密にして、国語の授業でも細かく指導できるプログラムとなった。

構想調書の仮説に対する評価

### 【仮説1】

世界が課題とする「環境・開発・人権・平和」の4分野について、大学、国際機関、企業と提携し、国連が具体的に提起している諸問題を探究し、生徒たちがチームとして新たな視点からその解決を目指すプロセスを確立することで、語学力の向上や主体的な学びの姿勢を育むことが期待できる。

○世界に目を向ける教育を行った結果、「海外で通用する語学力は必要だと思いますか」の質問には、「必要」「絶対に必要」が91.1%という数字を示した。このことからGRITプログラムが語学の学習意欲を大きく向上させたと考えられる。エビデンスとしては、3年生においては350名中、延べ159名の生徒が、この1年間で英検準一級以上の試験に挑戦した。約2人に1人が準一級以上のハイレベルな語学習得に挑戦したことは、意識の変容が行動の変容に移ったと考えられる。

○「世界の平和に貢献したいと思いますか」の質問には、89.5%の生徒が「貢献したい」と答え、非常に高い数字を示した。「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」という質問には、「平和に貢献したいと思い、進路を定めた」「模擬国連で世界の現状を知り、自分はどれだけ満足な生活をしているのだろうと、身の回りの生活を見直そうと考えるようになった。世界の平和のために今自分ができることは何なのか考えるようになった」「GRITをやる上で自分が思っている以上に世界が深刻な状況だということを知り、ニュースや新聞をよく見るようになった」などの回答があり、全体的に「学び」に対する意識が高まった。「大学を選ぶときに国際化に重点を置く大学への進学を希望しますか」の質問に、72.9%の生徒が「希望する」と答え、進路にも大きな影響を与えた。「将来留学したいと思いますか」の質問には「絶対にしたい」「できればしたい」が78.3%を示し、世界に大きく目を開いたと考えられる。「自分と意見の違う人の話や考え方を認める力は向上しましたか」の質問では、86.5%の生徒が「大変に向上した」「向上した」と答えた。

○高校2年生の「課題探究」の時期には、大学院生TAによるアドバイスや、創価大学研修における大学教授からのアドバイスの機会を設けた。高校3年生の「模擬国連」の時期には、JICA 関西によるアドバイスなどの取り組みを行うことで、国内にいても世界を感じることができた。大学教員を招いての「アカデミックライティング講座」を高大接続して行っているが、創価大学の教員からは「SGH以降、関西創価出身の生徒の学術的な論文作成能力が飛躍的に向上しています」との評価をいただいた。

## 【仮説 2】

世界の現状を知り、苦しみを分かち合う「共感力」の向上の中で、生徒自らが地球的課題に挑み解決しようとする「使命感」を培うことができる。

○関西創価の SGH プログラムである GRIT では、「環境・開発・人権・平和」の 4 分野を SDG s に照らして学んできた。3 年間 GRIT を学んできた高 3 アンケートでは、「世界で起こっている環境問題について関心がありますか」の質問には、「関心がある・少し関心がある」と答えた生徒が 85.6%、「世界の発展途上国における開発の現状や問題点について関心がありますか」の質問には、「関心がある・少し関心がある」と答えた生徒が 76.7%、「世界で起こっている人権問題について関心がありますか」の質問には、「関心がある・少し関心がある」と答えた生徒が 79.1%、「世界で起こっている紛争や平和への活動について関心がありますか」の質問には、「関心がある・少し関心がある」と答えた生徒が 82.5%といずれも高い数値を示した。そしてこの 4 分野について関心を持った時に、「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」という質問では、「気持ちの変化に伴う行動の変化」について、具体的な行動や変化が「環境問題」で 151 件、「開発問題」では 115 件、「人権問題」では 123 件、「平和問題」については 126 件の自由記述が回答された。主な回答として「環境問題」では、「エアコンや照明の使い方」「エコバックの使用」「トイレや歯磨きでの水の使用方法」「プラごみの削減」などがあげられ、「開発問題」では「フェアトレード商品の購入」「食品ロスをなくす取り組み」「募金活動の参加」など、「人権問題」では「身近なところでのいじめ」「学校でのジェンダー理解」「難民の現状を伝える啓発活動」などの行動が見られた。「平和問題」については「身近な家族や友達に自分の知っている核兵器の知識を話す」「現在起こっている紛争の現状を調べる」などの答えがあり、全般的には「もっともっと学びたい!」「勉強を始めた」「自分の将来が決まった」などの答えがあった。グローバルイシューについて、高校生という立場で大きくできることは少ないが、学年 350 名の中で 4 つの分野すべてに 100 件以上の何らかの行動を生徒たちが起こしている事実は、GRIT の教育効果として「使命感」「共感力」の育成に大きなものがあったと分析する。

○「他人のために献身的に働こうとする奉仕の気持ちはありますか」が 90.7%「身の回りで起こる問題に積極的に関わろうとする気持ちはありますか」が 82.2%と高い数値を示した。と答えた。「何か困難なことにぶつかったときに解決方法を探そうとする力は向上しましたか」という質問にも、81%の生徒が「大変に向上した」「向上した」と答えた。以上のアンケートを考察すると、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」につながる、グローバルリーダーとしての心を育んだと考えられる。

## 【仮説 3】

興味関心を抱く希望者には、高大連携プログラムとして、UP (University Partnership) クラスと呼ばれるグローバルイシューの基礎講座、SP (SOKA Progress) クラスと呼ばれる講座を開講。そこで学びを深めた生徒の希望者から、さらに選抜して、国際機関と提携してのオールイングリッシュによる LC (Learning

**Cluster)** プログラムを行うことで、全校生徒の学びを大きくリードするとともに、リーダーを育成することができる。

○本校の世界市民教育の中心である探究型総合学習 GRIT は、全校生徒を対象に「環境・開発・人権・平和」を SDG s に照らして行われる。希望者や希望者から選抜された生徒が学ぶ機会として設けられた UP・LC・国内フィールドワーク・海外フィールドワークそれぞれにおいて、GRIT と同じように「環境・開発・人権・平和」を SDG s に照らして行われる。希望者や選抜者が先進的に学んだ知識や、リサーチの手法、ディスカッションやプレゼンテーションの手法は、GRIT の授業の中でこの生徒たちの手で広く共有された。生徒自身がファシリテーターとしてリードすることで、質疑応答が活発になり生徒の学びを大きく進めた。

○UP、LC、フィールドワークの経験者から、多くの全国大会・世界大会の参加者が生まれている。今年も「世界津波の日」高校サミット、トビタテ！留学 JAPAN、「日米露の高校生による核不拡散教育会議」(CIF)、第 66 回「国際理解・国際協力のための高校生主張コンクール」全国大会、第 9 回 ESD(持続可能な開発のための教育)国際交流プログラム、「第二十二代高校生平和大使」などに選ばれた。

以上の理由から、本校の SGH の構想調書における仮説に対して、SGH プログラムは大きな効果を発揮し、目指していた「世界市民教育」は進んだと確信する。持たせた力として設定した「使命感」「共感力」「問題解決の創造力」についても、おおむね目標を達成することができた。今後の課題として、クラブ活動や生徒会などの諸活動の盛んな本校において、7 時間目に行われる SOKA Progress Class や、University Partnership Class をどのように交通整理しながら行っていくのかが大きな問題となっている。また、生徒に大きな触発を与え、リーダー育成の機会となってきた国内外の GRIT Field Work(アメリカ・東京・広島・東北)についても、その旅費のほとんどを SGH の予算で運営してきた。今後は管理機関からの資金援助をとともに、内容を精査して継続していきたい。GRIT での学びを深めるために、「TOK」(知の理論)の導入、言語技術的要素の習得と学術的文章を書く力を育成する「アカデミック・ライティング」の科目化、「探究基礎」の科目化を実施していく。SGH の 5 年間で開発したプログラムを、さらに発展させていきたい。

**【担当者】**

担当課	経理募金課	T E L	072-891-0011(代)
氏 名	坂井俊仁	F A X	072-891-0015
職 名	主任	e-mail	sakai@soka.ed.jp